

諸伝にみる建永の法難(三)

——住蓮山安樂寺所蔵「安樂寺縁起絵」と供養山易行寺所蔵

「住蓮御房安樂御房縁起」、「住蓮房縁起」を対比して——

伊藤 正順

一、研究の目的

法然上人が土佐国^①に、親鸞聖人が越後国に流罪、住蓮房・安樂房ら四人が斬罪に処せられたとする建永の法難について、筆者はこれまで種々の観点から問題を提起し、愚見を述べてきた^②。今回は、住蓮山安樂寺が所蔵する掛軸「安樂寺縁起絵」(一幅)と、同じく建永の法難と深い関わりをもつ供養山易行寺に所蔵されている掛軸「住蓮御房安樂御房縁起」(二幅)、並びにこの掛軸の絵解き台本である「住蓮房縁起」(一冊)を紹介することにより、両寺に伝わる絵伝(縁起)の特徴について考察することを目的とする。

二、住蓮山安樂寺と浄土真宗

筆者の自坊である住蓮山安樂寺は、建永の法難によって殉教された法然上人の弟子、住蓮房と安樂房の両僧を開基

諸伝にみる建永の法難(三)

とするが、平成十八年二月九日には、両僧の第八百回忌を迎える。現在、この大御遠忌に向けて、諸伽藍を整備中である。

筆者は、この寺をお預かりするようになって二十年近くになるが、実際に建永の法難の中心となった寺に住居していると、建永の法難について、机上の学問だけではなかなか理解できない、長い伝承の間に培われてきた信仰が垣間みえてくるように思われる。

住蓮山安楽寺は、法然上人二十五霊場の番外寺院として位置づけられている。しかし、全国各地から参拝される、いわゆる団体参拝を例にすると、浄土真宗系（ご門徒）による参拝が圧倒的に多く、全体のおよそ七割を数える。また、両本願寺で行なわれる得度式の前に、必ず参拝される寺族の方々もおられる。また、本堂内陣西側の中央には、「法然上人張子像」（室町時代頃の作）をまつている。その隣には、親鸞聖人が三十五歳の時に流罪に旅立てたときの姿貌といわれる「親鸞聖人旅姿像」が安置されている。さらに、この木像の須弥壇の前には、伝承と思われるが、親鸞聖人が使用された編笠と杖がいつの時代からか安置されている。

いずれにせよ、このように浄土宗系の寺院でありながら、古くより浄土真宗系の方々の参拝が多いのである。このことは、安楽寺の寺伝（縁起）を調査してみると、浄土真宗との関連が強いことが判明する。

つまり、先の論文で指摘したように、度重なる弾圧（法難）が行なわれ、専修念仏停止の院宣が下される最中、院の女房（松虫姫と鈴虫姫）が出家したことに起因する建永の法難の史実を、後世、浄土真宗中興・蓮如上人が女人往生の一つの手本としてこれを物語として体系づけ、盛んに説かれたことあたりから、浄土真宗との関連が始まるのではないかと筆者は考えている。このような史実から、どちらかというと住蓮房・安楽房の名前よりも松虫姫・

鈴虫姫の名前に重点が置かれているように、建永の法難の縁起が、女人往生という視点を添えて浄土真宗の方々によって大切に今日まで伝承されてきたと考えるのである。

このような点からご門徒の参拝が多く、浄土宗系の寺院でありながら、いつの時代かは断言できないが、親鸞聖人の木像や遺品などを安置した機縁も充分に納得がいくと思うのである。

三、両寺の縁起

さて、蓮如上人の時代、建永の法難についてどのような内容の説教が行なわれていたかについては、専想寺所蔵『松虫鈴虫物語』^④や『松虫鈴虫讃嘆文』^⑤によって、その一端を窺い知ることができる。また、明治三十二年に発行された『住蓮山安楽寺鹿ヶ谷因縁談 松虫鈴虫物語』^⑥（以下、『鹿ヶ谷因縁談』と省略）を繙いてみれば、その当時、浄土真宗の方々によって布教されてきた建永の法難の説教の内容を詳細に知ることができる。しかし、筆者は残念ながら現在まで、浄土真宗で伝統的に行なわれてきた松虫姫・鈴虫姫が登場する建永の法難の、二席、三席、というまとまった形の説教を聴聞したことがなかった。

しかしながら数年前、同じ建永の法難に関わりをもつ供養山易行寺を訪れた所、先代・赤松良雄上人から掛軸「住蓮御房安楽御房縁起」（二幅）と、この掛軸の絵解き台本「住蓮房縁起」（一冊）を拝見する機会に恵まれた。これらを検討してみると、先に掲げた三種類の文献にみられる内容と、その骨格がほぼ同様であることが判明した。また、視点を変えてみると、現在、住蓮山安楽寺が寺伝として使用している「松虫鈴虫和讃」や「安楽寺略縁起」^⑦や掛

軸「安樂寺縁起絵」の内容と比較してみると、両寺に伝わる絵伝（縁起）について、いくつかの相違点を見つけることができるのである。

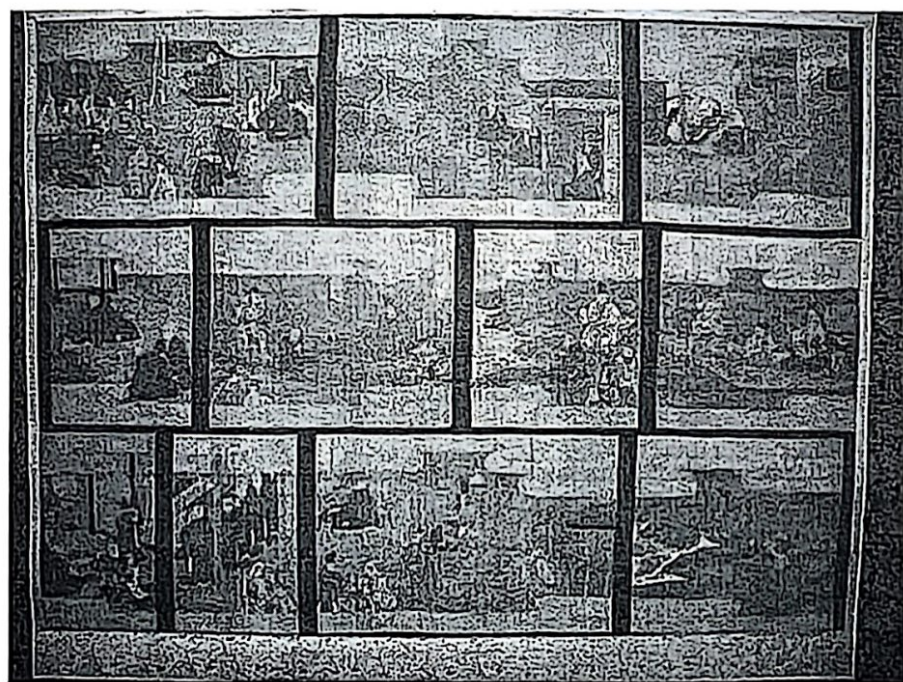
この点を踏まえて、まずはじめに、「安樂寺縁起絵」（一幅）を紹介することにより、住蓮山安樂寺の寺伝を説明してみたい。

四、「安樂寺縁起絵」について

古くから、住蓮山安樂寺の縁起（由来）を示す資料は、『松虫鈴虫和讃』^⑧、「安樂寺略縁起」、「安樂寺縁起絵」を代表として掲げることができるであろう。このうち「安樂寺縁起絵」（一幅）^⑨は、住蓮山安樂寺が所蔵する寺伝に関わる掛軸、七幅の中の一つである。絹本着色で、中興真空益随上人（江戸時代後期）の頃あたりに作られたものと推定されている。

この掛軸は、法然上人の絵伝の中から、特に安樂寺の縁起に関連するものを十一枚選び、一度に多くの人々に絵解きができるように一つの掛軸としてまとめたものと考えられる。^⑩この掛軸の絵解き台本は、残念ながら存在しない。しかし、後述するように、『松虫鈴虫和讃』と「安樂寺略縁起」にみられる内容と、その絵相とがほぼ同じである。これらを参照しながら、順を追って「安樂寺縁起絵」の絵相を概説していきたい。

五、「安楽寺縁起絵」の絵相について



（「安楽寺縁起絵」）

⑪	⑩	⑨	
⑤	⑥	⑦	⑧
④	③	②	①

（絵解き順序）

この掛軸は、三段組で十一枚の絵相から構成されている。下段の向かって右側から始まり、図中に示したように物語が展開する。以下、絵相について概説してみる。

① 法然上人が晩年、七十五歳の時に讃岐国に配流になられた流罪地先の情景が描かれている。法然上人の他、三人の僧侶が描かれている。この場面は、掛軸全体の「序分」に相当する。つまり、「なぜ、法然上人は讃岐国へ流罪になられたか」ということ……という形でこの絵解きが始まるのである。

② 場面は一転して、京都清水寺である。法然上人が仏面して高座にすわっているが、いわゆる『出家功德経』をこれから説かれようとするのであろう。こ

の会座に両姫が参詣する場面である。「安楽寺略縁起」には、この場面のことを「二人とも菩提心を発して、清水寺にて円光大師別時念仏始行し給ふ会下へ参詣して剃髪的身となり 後世の菩提をいのらんことを願はれければ 円光大師も御随喜しまして聞法の当下にかかる大信心を発し給ふこといと有難く侍り さりながら予がすすむる所の浄土宗門は他力本願にて出家棄欲をえらばず 三心具足して口称念仏だにとのふれば 決定往生疑ひなきよしを念比にしめし給ひて出家の儀を赦し玉はず」とある。この文意によれば、両姫は最初、法然上人に剃髪を懇願したことを伝えている。

- ③ この場面は、両姫が安楽寺の前身である鹿ヶ谷草庵に参詣している所である。「安楽寺略縁起」によれば、法然上人に剃髪の夢が叶えられなかった両姫は、その後、鹿ヶ谷草庵での六時礼讃会に何度も参詣したことを伝えている。

- ④ 両姫が鹿ヶ谷草庵で剃髪される場面が描かれている。今まさに剃髪されようとする姫の着物のたもとが腰の後ろあたりで固く結ばれている。これは、たもとは俗世間の象徴であり、たもとを後ろ側で結ばれたのは、再び華やかな生活には戻らないとする出家への決意を意味する作法である。その後、『松虫鈴虫和讃』や「安楽寺略縁起」によれば、松虫姫は妙智法尼、鈴虫姫は妙貞法尼と法名を授けられ、紀州の粉河（寺）へ身を隠すことになる。

- ⑤ 後鳥羽上皇が紀州熊野に臨幸中、両姫が秘かに出家したことに対して上皇は激怒し、天台座主真性と共に、専修念仏教団を弾圧しようとする密談がなされている場面が描かれている。

- ⑥ 住蓮房が近江国馬淵で処刑される場面が描かれている。

⑦ 安樂房が六条川原で処刑される場面が描かれている。

⑧ 法然上人が四国に向けて配流となる場面が描かれている。

⑨ 生口島の光明坊（光明三昧院）での阿姫の生活が描かれている。松虫姫が病床に就き、鈴虫姫が看病している姿が描かれている。

⑩ 法然上人が四国に配流になる途中、生口島の光明坊（光明三昧院）に寄ったという説^⑪があるが、これがその場面である。法然上人の最後の教化に、阿姫は涙を流している。『松虫鈴虫和讃』、『安樂寺略縁起』によれば、松虫姫が三十五（三十六）歳、鈴虫姫が四十五歳で往生したことを伝えている。

⑪ これは流通分である。場所はどこか判らないが、南都北嶺の教団が専修念仏教団に対し念仏の抑制鎮圧を試み弾圧を繰り返したが、逆に念仏信者が増加したことを表わしている。『安樂寺略縁起』では、「誠に此二女は五障三従の身なれども 捨家棄欲にしてふかく名利をいとひ 穢惡捨志の心深切にして女人往生の先達なれば今の世までもかたり伝える事実にとほりに侍る」と結んでいる。また『松虫鈴虫和讃』には、「かかる謂われを聞く人は 仏恩報謝の爲にとて 明けくれ称名唱うべし 南無阿弥陀仏阿弥陀仏」と結んでいる。

以上、「安樂寺縁起絵」の絵相について、『松虫鈴虫和讃』、『安樂寺略縁起』を参考にしながら概説してみた。この「安樂寺縁起絵」の絵相は、『松虫鈴虫和讃』や「安樂寺略縁起」に示される内容とはほぼ同様であることがわかる。

六、供養山易行寺と「住蓮房縁起」について

滋賀県近江八幡市千僧供町には、住蓮房と安楽房の遺骨を納めた御僧塚と呼ばれる大きな塚がある。建永二年（一二〇七）二月九日、住蓮房はこの地にほど近い馬淵において殉教となるが、「安楽房と一緒にこの地で弔ってほしい」との遺言から、後世、元禄年間の頃、御僧塚に二つの五輪石塔を建立して葬られたと伝えられている。

御僧塚の北二百メートルあたりには、住蓮房の首を洗ったとされる「住蓮房首洗いの池」がある。二基の五輪石塔は、もともとこの池の近くに建立されたという伝説（「近州蒲生郡馬淵村御僧塚縁起」による）もある。また、御僧塚の西三百メートルあたりに供養山易行寺（浄土真宗本願寺派）がある。供養山易行寺の本堂内陣の南側には、住蓮房と安楽房の木像と位牌が安置されている。毎年、御逮夜と御命日にあたる二月八日と九日の両日には、両僧の法要が営まれている。

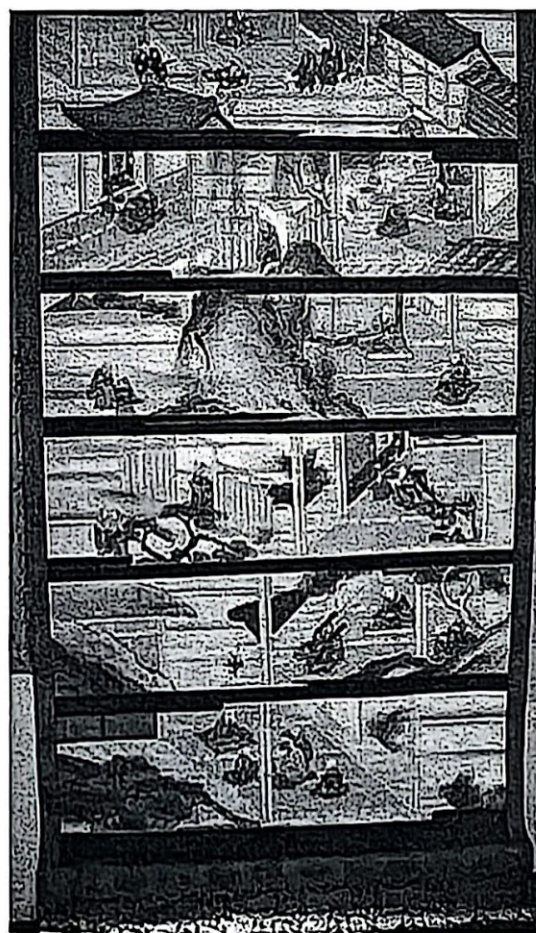
今回紹介する文献「住蓮房縁起」（一冊）は、今から四十九年前、両僧の第七百五十回大御遠忌を翌年に控えた昭和三十年二月八日に記されたものである。この文献は、この日に新調された掛軸「住蓮御房安楽御房縁起」（二幅）の絵解き説教本（墨書）であり、当日の写真も添えられている。

その構成は、目次・絵伝の説明・序・はじめに・本論から成っている。本論は十段に分かれていて、本論部分は四十八頁である。本論には、四十四首の和歌が記されている。

本書は、浄土真宗において伝統的に行なわれてきた建永の法難の唱導談義を知る上で、重要な文献と思われる。

⑥-B	⑥-A
⑤	
④	③
②-C	②-B
②-A	
①	

(絵解き順序)



(『住蓮御房安楽御房縁起』第一幅)

以下、「住蓮房縁起」の内容について「住蓮御房安楽御房縁起」^②を参照しつつ概説していきたい。

七、「住蓮房縁起」について

第一、諸行無常御発心の段

住蓮房と安楽房が世に無常を感じ、共に法然上人の前で出家をするという段(図相①)。次の五首の和歌が記されている。

(安楽房の剃髪)

世にかかるおのが涙と思へ共 浮世の中ぞ
出て果てし身は

(安楽房の剃髪)

とげがたき苦しみの輪をぬけ出でて 此世
からなる心安楽

(法然上人の返歌)

苦をぬけて身を安楽と思いなば 苦にかは

りけん御恩忘るな

(住蓮房の返歌)

消えがたき炎の車に引替えて 蓮の上が住まひとぞなる

(法然上人の返歌)

慈悲ふかき弥陀の恵みにあえばこそ おなじ心も蓮とぞなる

第二、是生滅法両女官発心の段

建永元年（一二〇六）十一月、後鳥羽上皇が熊野臨幸のため約五十日間の不在中、松虫姫と鈴虫姫が、たまたま鹿ヶ谷草庵での法然上人の教化にあい、その場で出家を願ひ出た（図相②—A）。しかし、法然上人と両僧は「そのままでよい」と退けた。和歌を一首残し、後日、夜中御所を抜け出し、両僧の前で出家し（図相②—B）、両僧と別れる（図相②—C）いきさつを述べる段である。ここでは、六首の和歌が記されている。

(両姫、出家を乞う歌)

哀れなる浮世の中にすこす身を 知りつつ捨つる人はつれなき

(剃髪の後、鈴虫姫お礼の歌)

思ひきや花の相をおしむ共 末の薪をいかで忘れじ

(安楽房の返歌)

おしみつつ野辺の薪となさん身を おしまで宿る花の臺で

(出家の後、別れの歌、上の句松虫姫、下の句鈴虫姫)

身になれし錦の小袖やきすてて 弥陀のみ国に墨(住)染の袖

(鹿ヶ谷草庵の外で、上の句鈴虫姫、下の句松虫姫)

消やすき露の命は何国とも 後の世ちかき法のこのかみ

(送別の歌、上の句安楽房、下の句住蓮房)

かくて行くかりの此身と今日限り あはん蓮の臺にてこそ

第三、色は匂えど散ぬる報告の段

上皇の許可なく両姫を剃髪させた住蓮房と安楽房が法然上人に詫びる段(図相③)。ここでは、二首の和歌が記されている。

(法然上人が宥めた後に、住蓮房)

法の師の上なき慈悲に育てられ 思へどうれし身の行衛哉

(法然上人の返歌)

身にかくて思ひだすにも心せば 行末迷ふ人の心に

第四、我世誰ぞ常ならむ幽霊済度の段

迷いさまよう幽霊が両僧の手厚い供養により救済され、夜、夢枕に無事成仏したと伝える段(図相④)。ここで

諸伝にみる建永の法難(二)

は、和歌は記されていない。

第五、有為奥山越えて母子別の段

住蓮房が自分の犯した罪の重大さに気づき、自首しようと決意して、母に別れを告げに行く段（図相⑤）。ここでは、二首の和歌が記されている。

（住蓮房が母に捧げる歌）

此世には親子便りに思へ共　行く先の夜は南無の一聲

（安楽房）

親と子が現世未来とかわれ共　待つぞや待たれ弥陀の浄土で

第六、生滅滅已法難の段

『御伝鈔』下の冒頭の文章を引用して、法然上人や親鸞聖人の流罪、門弟の死罪などが決定した（図相⑥—A）。首切り役の佐々木吉実との会話（図相⑥—B）、住蓮房が法然上人に宛てた書状や、辞世の歌（図相⑥—C）などを伝える段。ここには、十九種の和歌が記されている。

（住蓮房、牢獄に入れられる際の歌）

かりの世のせめくについて思ふ哉　永き闇路を出る嬉しさ

（安楽房の返歌）

⑩-C
⑩-B
⑩-A
⑨-B ⑨-A
⑧
⑦ ⑥-C

(絵解き順序)



(『住蓮御房安楽御房縁起』第二幅)

何とてやゆふ言の葉もなかりけり 南無阿弥陀
仏の御名の他には

(善信房)

白菊や染めて詔ふこと勿かれ 色どりもなく繕
ひもなし

(住蓮房)

念佛を申すが罪になるとても (劫) 火に替わ
る御慈悲忘れじ

(安楽房の返歌)

人ころし火附盗賊入れはせで 念佛申す者の牢獄

(住蓮房、善信房への返歌と浄門坊の見舞いのため)

諸共にくさは毎におく露の 時こそかわれ消
も残らじ

(安楽房)

今更に消るとなにか思ふらん かねて蓮に宿る
身なれば

(浄門坊の返歌)

数しれず身を捨てたるも悟られず 悟りきはめて死ぬる嬉しさ

（首切り役 佐々木吉実）

かりの身の化業は何れちがへ共 向へたまへや蓮の臺で

（住蓮房お礼）

先立てば必ずむかひ申さなん 蓮の半ばをわけてぞ待つ

（住蓮房、辞世の歌）

極楽に詣らんことの嬉しさに 身をば佛にまかせぬる哉

（安樂房、辞世の歌）

此程のかくし念佛あらはれて 弥陀の浄土にからめ捕るる

（法然上人）

送りける紀念の言葉たがふまし 後より往かん西の彼の岸

（法然上人、禪光坊に召し一首）

先に行く此身をあとにふりすてて 弥陀の御国へ急ぐ尊さ

（禪光坊の返歌）

我きいて急がるとは思へねど 第十八の綱に引かれて

（禪光坊の辞世）

めぐまれて罪の鎖はとくるもの 何かはあらん今日の我身は

(正親坊)

罪とがの重きかるきもおしなべて　ともに引かるる弥陀の願力

(浄門坊の返歌)

罪とがは弥陀の願力へだてない　されどもあとに残る身ぞうき

(刑を受けた時の辞世、上の句正親坊、下の句西意坊)

御佛の深き恵みにあへばこそ　今日の苦しみ忘る嬉しさ

第七、あさき夢みしゑひもせず御別れの段

法然上人の命令で、浄門坊が両僧の最後の見舞いに行く段(図相⑦)。ここでは、五首の和歌が記されているが、そのうち三首は前の段と同じであるから、二首のみ掲げる。

(安楽房、別れの段)

一度は死なねばならぬ命ぞや　末の契りを待つぞ嬉しき

(住蓮房の返歌)

今の世にまた逢ふ事も風吹く　弥陀の御国においてたよりを

第八、寂滅為楽ノ一　安楽仕置の段

安楽房が六条川原において処刑される段(図相⑧)。遺言として、自分の遺骨を住蓮房と共に合葬してほしいこ

諸伝にみる建永の法難(三)

とを添えている。ここでは、三首の和歌が記されている。

(安楽房)

吉水と見るもうれしい今日限り 心の垢を洗いそそぎて

(安楽房の処刑の際)

切らるとも心はきれじ此つるぎ よも金剛の信は切れまじ

(安楽房、最後の辞世)

形なき心ぞ今日は安楽の 蓮の臺に身を結びけり

第九、寂滅為楽ノ二 住蓮仕置の段

住蓮房の処刑(図相⑨—A)と、佐々木吉実が住蓮房に母への遺言を尋ねる段(図相⑨—B)。住蓮房が京都三条大橋から馬淵に向かう途中、日野岡(日岡)、追分、逢坂、大津打出の濱などあたりで詠われた五首の和歌が記されている。

(住蓮房、日野岡あたりで)

日野岡のほれば遠き別れ哉 心ぞ通ふもとの吉水

(首切り役、佐々木良実)

法の友送る月日野岡に来て 流れの末をたのむ吉水

(住蓮房、追分あたりで)

名をきけば心も闇も晴れにけり 娑婆と浄土の心追分

(蟬丸)

逢坂とたれぞいいなすなつかしや 法の師匠に逢う事もなし

(住蓮房、大津打出の濱あたりで)

驕慢の頂き高き比叡山 恨みぞながき打出の濱

第十、京畢段

両僧の遺骨を合葬して、御僧塚と名づける(図⑩—A)。その傍に一字を建立して安樂寺とする。蓮池を住蓮池と名づける。元禄年間のはじめに両僧の二基の石塔を置き(図相⑩—B)、供養山易行寺に両僧の木像を安置すること(図相⑩—C)を記した段。ここでは、和歌は記されていない。

八、両寺の縁起の相違(安樂寺に伝わる建永の法難の縁起と、浄土真宗に語り継がれている建永の法難の伝承の相違について)

以上、供養山易行寺に所蔵されている掛軸「住蓮御房安樂御房縁起」の絵相を、その絵解き台本である「住蓮房縁起」を通して概説してみた。これら二本に示されている内容は、『松虫鈴虫物語』や『鹿ヶ谷因縁談』の内容と、その骨格はほぼ同じであると考えられる。したがって、これら二本の内容は、およそ連如上人から始まる浄土真宗

諸伝にみる建永の法難(二)

に伝統的に語り継がれてきた建永の法難の伝承をそのまま受け継いでいると考えられるのである。

また一方では、住蓮山安楽寺に伝わる建永の法難の縁起と、これを比較してみると、相違点がいくつかみられる。これは、およそ室町時代から伝承されている両者の相違点であり、と同時にそれぞれの特徴であるとも考えられるのである。このことを認識するために、両寺の伝承を今一度確認しておきたい。

まず、住蓮山安楽寺の伝承について、『松虫鈴虫和讃』、『安楽寺略縁起』、『安楽寺縁起絵』によってまとめてみると次のようになる。

法然上人が清水寺で出家の功德について教化され感銘を受けた両姫は、その場で法然上人に剃髪を求めた。しかし、「あるがままに念仏をとなえればよい」と剃髪を断られた。後日、後鳥羽上皇が熊野臨幸の留守中に、両姫は秘かに御所を抜け出し、鹿ヶ谷草庵で、住蓮房・安楽房の前で剃髪出家し、粉河に隠れた。このことに激怒した上皇は、両僧を死罪とし、法然上人を讃岐国に流罪にした。その後、松虫姫は妙智法尼、鈴虫姫は妙真法尼と授けられ、加太が浦から、生口島光明坊（光明三昧院）に赴いた。法然上人は四国に配流になる途中、光明坊（光明三昧院）に寄り、両姫を教化した。^⑬ 松虫姫は三十五（三十六）歳、鈴虫姫は四十五歳で往生した。

次に、浄土真宗で伝統的に伝承されている縁起について、『松虫鈴虫物語』、『鹿ヶ谷因縁談』、『住蓮房縁起』によってまとめてみると次のようになる。

両姫は、法然上人が清水寺（あるいは鹿ヶ谷草庵）^⑭で出家の功德についての説法に教化された。後日、後鳥羽上皇が熊野臨幸の留守中に、秘かに御所を抜け出し鹿ヶ谷草庵で、住蓮房と安楽房の前で剃髪出家し、粉河へ隠れた。上皇は両姫が不在になったことの経過を調べた所、法然上人の仕業であることをつきとめ、即刻、流罪^⑮（死

罪^⑩を命じた。善知識が流罪（死罪）になつては大変と、住蓮房は志願して法然上人の身代わりとなり、年老いた母に別れを告げにいく。住蓮房は法然上人にあてた書状と辞世の歌を残した。

続いて、両寺に伝わる縁起の共通点と相違点をまとめてみる。

まず、共通点について掲げてみる。

両姫は、法然上人が清水寺（あるいは鹿ヶ谷草庵）での出家の功德についての教化に感銘して出家を望むようになったこと。

両者とも室町時代の文献では、最初に法然上人に剃髪を懇願していること。

両姫が出家したのは、後鳥羽上皇が熊野臨幸の留守中の出来事であつたこと。

出家の後、両姫は粉河に身を隠していること。

これらのことは、両寺にほぼ共通している事項である。

次に、相違点について掲げてみる。

浄土真宗では、両姫を剃髪したのは法然上人の所作であり、住蓮房（と安樂房）が、師匠の身代わりになる記述がある。このような伝承は、住蓮山安樂寺の縁起にはみられないこと。

また、住蓮房は身代わりを決めた後、すぐさま母に別れを告げに行くが、この伝承もみられないこと。

また、住蓮房が法然上人に宛てた書状と辞世の歌の伝承もみられないこと。

一方、浄土真宗では、両姫が粉河に身を隠した後のことについて、光明坊（光明三昧院）に隠棲した伝承はな

諸伝にみる建永の法難（三）

いこと。

浄土真宗では、一部の資料に「自害した」^②という説はあるが、浄土真宗では女人往生を主眼としているためか、両姫の出家後の事項については、享年も含めて全く伝えられていないこと。

これらのことが相違点として掲げられよう。これらは遠く室町時代より伝承されている両者の相違点であり、と同時に両者の特徴といえるであろう。

九、まとめ（蓮如上人が後世に伝えたかったこと、住蓮山安樂寺が伝えなければならないこと）

さて、蓮如上人は松虫姫と鈴虫姫が出家したことを女人往生の一つのモデルとして布教された。蓮如上人は、この物語で一体何を伝えたかったのであろうか。このことは、『松虫鈴虫物語』の最後の箇所において端的に表されていると思われる。この箇所には、次のようにある。

松虫鈴虫十九十七ニテ出家シケルト 住蓮ガ善知識ノ命ニカハリケルコト マコトニ惡道ヲオソレ極樂ヲネ
ガフココロザシ ナミダモトドラス 念佛往生ヲトケントオモハンヒト 住蓮ヲテホントスベキモノナリ
タダ信心決定シテ念佛申シタマハバ 松虫鈴虫住蓮トヒトツハチスニ生センコトナニノウタガヒアルベシ
南無阿弥陀仏^③

松虫姫と鈴虫姫が、度重なる弾圧（法難）の中、専修念仏停止の院宣が下される最中に出家を選ばれたことは、厭離穢土、欣求浄土の思いが相当あったことと想像できる。両姫は密かに出家されたわけであるが、そのような状

況下にあつて、自らの剃髪出家の後に、専修念仏教団へのさらなる弾圧が企たれることは、両姫も充分想定できていたことと思われる。それにも拘らず、剃髪出家を選ばれた両姫の、それぞれ個々の人生の決意を蓮如上人は示されたかつたのではなからうか。

それともう一つ、住蓮房の身代わり説である。

師匠のために、住蓮房が自ら志願して身代わりとなつたことの意義を蓮如上人は伝えられたかつたと考えるのである。両姫の伝説について、一般的に「悲哀に満ちた物語」であると扱えられることが多いが、決してそれだけの問題ではないと考えるのである。まだ女性の自立を許されていなかった時代において、自ら剃髪出家という道をあえて選ばれた人間として、あるいは女性としての生き方、生きざまを蓮如上人は伝えたかつたのではないかと考えるのである。また、このことに加えて住蓮山安樂寺が伝えなければならないことがあると思われる。それは、「安樂寺縁起絵」の最後の絵相、流通分の箇所である。この建永の法難を契機として、ますます専修念仏の信仰が高まつたということである。

『鹿ヶ谷因縁談』の結びには、このことがよく著わされているのでここで掲げてみる。

併し能く能く思ひ回して見れば、この御流罪が有つたればこそ反つて夫れが逆縁にて、田舎辺土の尼喚までが、弥陀本願の不思議を聞いて、浄土参りの出来る様、念仏門が御繁昌。加様に聴聞するときは、法然様の御流罪は、奈良叡山の、悪業の仕業ばかりではない。滅後六百余年の今日の、此座の御互いが、思はぬ苦勞を掛けましたことぞと、誤まり果てて御恩の称名、怠慢なく喜ばれよ先づ。^②

法然上人の流罪をはじめとする建永の法難は、比叡山や南都興福寺だけの仕業ではない。この伝承に耳を傾ける末

代の衆生は、この逆縁の因縁を知り、誤解を認めて懺悔し、自身の身を正し、報恩感謝の念仏を頂かなければならないことを伝えることである。

註

- ① 実際には、讃岐国（現在の香川県高松市あたり）に配流となる。
- ② 拙稿「諸伝にみる建永の法難（二）——住蓮房・安樂房を中心として——」（『西山学会年報』第五号、平成七年六月）。同「諸伝に見る建永の法難（二）——住蓮房と安樂房の処刑地を中心として——」（『法然上人研究』第五号、平成八年四月）など。
- ③ 拙稿「『安樂寺略縁起』の成立過程に関する研究——專想寺所蔵・講義本『松虫鈴虫物語』とその周辺——」（『西山学会年報』第七号、平成九年六月）参照。
- ④ 『真宗史料集成』第五卷所収。
- ⑤ 『室町時代物語大成』第十二巻所収。「松虫鈴虫物語」と同本であるから、本稿では後者のみを使用する。
- ⑥ 野田憲雄著、永田文昌堂刊。明治三十二年五月発行以来、版を重ね、その体裁から昔の唱導を窺い知ることができる貴重な資料である。
- ⑦ 江戸時代の末頃に発行された縁起書。その全文は、註③の論文に掲げた。
- ⑧ 『松虫鈴虫和讃』は三種類存在するが、本稿では、住蓮山安樂寺の檀信徒（観音講）が用いている六十一句本を使用する。（拙稿「『安樂寺略縁起』に関する二・三の問題——住蓮房の身代わり説『松虫鈴虫和讃』——」（北畠典生博士古稀記念論文集『日本仏教文化論叢』上巻所収、平成十年六月刊）参照。
- ⑨ 縦七三センチ横一〇〇センチ。
- ⑩ 『四十八巻伝』などの図相の照合を検討してみたが、いずれの絵伝を依用しているのかは判明できなかった。この点は、今後の課題としたい。
- ⑪ 生口島光明坊（光明三昧院）所蔵『御寺当山並洛東鹿谷縁起』（天明七年（一七八七）写本）など。

- ⑫ 縦一三四センチ横六九センチ（二幅とも）。
 ⑬ ただし、これは「安楽寺縁起絵」のみの伝承である。
 ⑭ 『松虫鈴虫物語』の説。
 ⑮ 『鹿ヶ谷因縁談』、『住蓮房縁起』の説。
 ⑯ 『松虫鈴虫物語』では、法然上人の前で剃髪出家したと伝える。
 ⑰ 『松虫鈴虫物語』の説。
 ⑱ 『鹿ヶ谷因縁談』、『住蓮房縁起』の説。
 ⑲ 『鹿ヶ谷因縁談』、『住蓮房縁起』の説。
 ⑳ 『鹿ヶ谷因縁談』（註⑥の五十七頁）には「遂に自書して相果てた」とある。
 ㉑ 註④の六七八頁。
 ㉒ 註⑤の六一頁。